北イエメンにおける伝統的地域区分と部族

The Traditional Regional Divisions and
Tribes in North Yemen松本 弘^{*}
MATSUMOTO Hiroshi

ABSTRACT The subject of my research is the relationship between tribal structures and regional divisions in North Yemen. The research is organized into three parts: (a) the current situation of tribes and rural administrative divisions; (b) the history of traditional regional divisions in medieval times; and (c) the evolution of traditional regional divisions to the rural administrative divisions of North Yemen in the modern era. This article draws on (b).

The terms *mikhhlāf* and *‘uzlah* are the indigenous titles of the Yemeni regional divisions. However it is not clear what they comprise since there has been insufficient research on Yemeni regional divisions. References to the *mikhhlāf* and *‘uzlah* in three classic texts, al-Hamdānī’s *Ṣifāh Jazīrah al-‘Arab*, Yāqūt’s *Muʿjam al-Buldān* and al-Ḥajarī’s *Majmūʿ Buldān al-Yamaniyyah wa Qabā’il-hā*, clearly indicate that the *mikhhlāf* is the term used to describe the regional division in the southern highlands of North Yemen during the medieval period, while the *‘uzlahs* are sub-divisions of the *mikhhlāf*.

Next, I study the tribal genealogies (al-Hāmdanī’s *Kitāb al-Iklīl* and the above Yāqūt’s text) to trace the ancestry of the component tribes of the *mikhhlāfs*. This indicates that the tribes of Ḥimyar al-Humaysa^c were the most influential, especially those tribes descending from Jusham in the genealogies. Thus, it can be said that the *mikhhlāf* and *‘uzlah* are historically the indigenous structure of regional divisions in the southern highlands of North Yemen, in which the component tribes of those are the Jusham tribes.

* 財団法人国際問題研究所主任研究員

Senior Research Fellow, The Japan Institute of International Affairs

I. はじめに

筆者はこれまで、北イエメン（1990年南北イエメン統一・イエメン共和国成立以前の、イエメン・アラブ共和国の範囲⁽¹⁾）の部族と地域区分の關係に關し、(A)現在の地方行政区分と部族の關係[松本 1996]、(B)中世におけるイエメン固有の伝統的地域区分と部族との關係、(C)近現代において伝統的地域区分が地方行政区分に変容していく過程[松本 1998]の3部構成で研究を試みた。本稿は、上記(B)にあたるものである。紙数の制約から、上記既発表論文に述べられた問題關心及び同論文の内容についての説明は割愛するが、本稿の論述のために必要な限りの、北イエメンの部族と地域区分の概要は以下の通りである。

イエメンの諸部族は南アラブに属し、かつカハターンの子孫であるサバ Saba' を共通の祖先とする。サバには2人の息子、ヒムヤル Ḥimyar とクフラーン Kuḥlān がおり、部族の伝説的系譜は、まずこの2系統に分かれる。ヒムヤル系はその2人の息子から、さらにヒムヤル・アル＝フマイサア Ḥimyar al-Humaysa' とヒムヤル・アル＝クダーア Ḥimyar al-Qudā'ah に分かれる。クフラーン系もその子孫から、ハムダーン Hamdān、クフラーン・マズヒジュ Kuḥlān Madhḥij、その他に分かれ、ハムダーンはさらにハーシド Ḥāshid とバキール Bakīl に分かれる。これらの名称はすべて系譜上の人名であり、それは部族の系統を表している。部族 qabilah とは、ここからさらに系譜が下って、系統を表わす各人のいずれかの子孫を共通の祖先とする集団を意味している。それゆえ、部族の名称もその系統と同じく、各部族の系譜に基づいた人名となっている例が多い。

また、北イエメンにおける地方行政区分は、州 muḥāfazah－郡 qaḍā'－ナーヒヤ nāḥiyah－ウズラ⁽²⁾ ʿuzlah (pl. ʿazal)－村 qaryah という5レベルの階層的な地域区分から成っている（それぞれ上位の地域区分は、より小規模な下位地域区分の集合体）。そこでは、一般にナーヒヤが部族に対応し、ウズラがセクション（部族を構成する下位集団）に、村が大家族（セクションを構成する下位集団）に対応している。つまり、部族－セクション－大家族という部族構造に対して、ナーヒヤ－ウズラ－村という地域区分構造が、それぞれに対応するかたちで設けられている。ところが、ナーヒヤという呼称は全国一律なのに對し、ウズラ・レベルの地域区分は、公式な呼称であるウズラの他にも、実際にはナーヒヤによって「4分の1 rubʿ」, 「5分の1 khums」といった単分数やミ

フラーフ *mikhālāf* (pl. *makhālīf*) という呼称も使われている。単分数の場合は、イエメンでは古代からセクションに対する呼称に単分数が用いられており [Beeston and others 1982: 132, 150], それが地域区分の呼称に転用されたものと考えられる。

しかし、ウズラやミフラーフという呼称はイエメン固有の言葉であり、呼称からだけではその意味するところはわからない。では、このウズラとミフラーフとは、一体いかなるものなのか。これが本稿の主題であり、ウズラとミフラーフの歴史を追いながら、それら伝統的地域区分と部族との関係を明らかにすることが、以下の論述の目的となる。

しかし、この作業にはいくつかの問題点が存在する。第一に、後に用いる中世の各地理書には、地域区分の地名と位置しか記されておらず、その厳密な境界や範囲はわからない。それゆえ、その範囲は現在の地域区分から推定する以外に方法がなく、その地理的な特定は極めて大まかなものとなる。第二に、部族と地域区分の関係を歴史的に調べる場合、それは部族名と地域区分の地名との照合が基本となる。しかし各地理書に、ある地域区分にはある部族が居住していると記されていても、その地域区分に当該部族以外の住民がいないということはありえない。それゆえ以下の論述で、地域区分とその住民である部族といった表現をする場合でも、それはその地域区分が、大勢として特定の部族に占められているという意味であり、その地域区分と部族の領域が一致しているという意味ではない。

第三に、ウズラやミフラーフという地域区分の呼称については、住民自らがそう呼んでいるのか、外部の他者（たとえば、記録者）からそう呼ばれているだけなのかを、判別しなければならない。しかし、その確定的な判別基準は資料そのものからは得られず、それは各資料の比較検討から推定する以外にない。また、現在のミフラーフは、地域区分の呼称としてのみ用いられるが、過去には幅広い意味を有していた。それは一般的な「地方」、「地域」、「方面」という意味で用いられるほか、ミフラーフの複数形に定冠詞を付けた *al-makhālīf* は、それ自体で「イエメンの諸地方」を意味する場合があるし、さらには「諸ミフラーフの人々 *ahl al-makhālīf*」という表現はイエメン人を、「諸ミフラーフの集まり *jami' al-makhālīf*」という表現はイエメンそのものを意味した [Yahyā 1968, I: 153, 180, 184, 209, 243, 249, 367]。このため、資料中の

様々なミフラーフのなかから、特定の地域区分の呼称としてのミフラーフを特定し、それに限って議論を行わなければならない。

以上の問題点に留意しつつ、歴史的にはイエメンそのものの代名詞となる場合もあったミフラーフから、その歴史と部族との関係を論じることとする。

II. 伝統的地域区分と部族との関係

1. ミフラーフとウズラに関するこれまでの定義

ミフラーフそのものに関する先行研究はない。しかし、それについては断片的ながら、以下のような説明がなされている。イエメンの前イスラーム期の言葉であるサバ語では、ミフラーフに相当する HLF は「町の門」、「地域」、「町の近辺」を意味していた [Beeston and others 1982: 60]。マドアジュは、「イスラームの初期、イエメンは有力な部族の割拠状態にあり、各部族はそれぞれの地域 province (mikhlaḥ) を支配していた。」 [Mad'aj 1988: 5] と述べているが、その典拠は示されていない。12世紀の詩人ナシュワーン (d.573/1177 or 8) は、「ミフラーフはイエメン人の言葉で地域 al-kurah を意味し、またその地域の集まりをも意味する。」 [Nashwān 1981: 34] と述べ、13世紀の旅行家イブン・アル＝ムジャールウィル (601-90/1204 or 5-1291) は、「各ミフラーフは高地の砦を有しており、砦の周囲に村や耕地がある。ミフラーフとはイエメンの高地にのみ存在する、大規模な地域を表わす言葉である。」 [Ibn al-Mujāwir 1986: 169-70] と述べている。同じ13世紀のヤーカート（後述）はミフラーフを、「地域の所在地であり、部族の名称でもある。」 [Yāqūt 1955, V: 67] と述べ、今世紀半ばのハジャリー（後述）は、「ミフラーフは、多くの [より小規模な] 地域からなる [より大規模な] 地域であり、それは『広さ sa'ah』や『狭さ ḥaqārah』といった言葉とは異なるものである [一般的な『地域』を意味しない]。そして常に、地名とともに用いられる。」 [Hajarī 1984, II: 697] と述べている。

またアクワも上記ヤーカートと同様に、ミフラーフを「地域であり、かつ部族に関わる表現」 [Akwa' 1987: 81-2] としているし、アブー・ガーニムは、「ミフラーフとウズラは、古代ヒムヤル時代からヤリーム Yarīm とイッブ Ibb の地方にあった地域区分」 [Abū Ghānim 1985: 65] と記しているが、残念ながらこれらにもその典拠は示されていない。一方、ボスワースはミフラーフを、「特にイエメンで用いられる、中世イスラームの行政地理の用語」 [Bosworth 1993:

35] としている。それ以上の説明は述べられていないが、おそらくこれは、17世紀のイエメン・ザイド派の年代記『イエメンの記録における平安の極致』の中の「ミフラーフの支配者 *ṣāḥib mikhhlāf*」[Yaḥyā 1968, I: 288-9, 292] という記述や、ウィルソンの以下の論述に基づく推察であると思われる。

イエメンの歴史的資料の大半が、ミフラーフという言葉を非常にあいまいに用いている。少数の資料が厳密に用いているものの、一般的には不特定の地域を指している。*Sīrat al-Hādī*[イエメン・ザイド派イマームの伝記]はミフラーフを、飼料税徴収に関係する村々と記しており、行政的な意味を示唆している。ヤアクービー（後述）は、ミフラーフの定義を試みて、それは地域 *kuwar* や町 *mudun* と同様なものと大まかに述べている。ハムダーニー（後述）が記したミフラーフの内、いくつかにはその中心地が述べられ、ごく少数にその支配者が記されているが、[中略] そのほかは中心地も支配者も存在しないようである。[Wilson 1989: 43]

確かにザイド派の諸資料のごく一部には、ミフラーフという地域区分が、地方の政治や行政に関わるかのように記されているが、その細かな状況は述べられていない。そもそも中世において、イエメンに地方行政に類するものが存在したかどうかについても、現在のところ明らかではない。それゆえ、ミフラーフを中世の行政区分と考えることには、筆者は疑問を持っている。

一方、ウズラについては、より少数の断片的な説明しか確認できない。それらによればウズラとは、国家の権威が及ばない伝統的な地方自治の状況にあり、一般に特定のワーディー流域や山腹、農耕地内の村々によって構成される [e. g., °Azāzī and Kurūzah 1975: 255-6; Steffen 1979: I/47-8]。しかし、これらはすべて、現代の研究者によるウズラの現状に関する説明であり、筆者の知る限り中世や近代の諸資料には、ウズラの説明は出てこない。

要するに、以上のような断片的な記述をいくら集めても、ミフラーフとウズラが一体何であるのかは、一向に見えてこない。両者が部族に関係した地域区分であることは明らかだが、それ以上のことは、過去の説明とは異なる方向から調べていく必要がある。

2. 資料批判

ミフラーフとは何かを考えるのであれば、まずイエメンにおけるすべてのミフラーフを確認しなければならない。諸資料のなかには個々のミフラーフに言

及しているものも多いが、筆者の知る限り、すべてのミフラーフを記述している資料は、以下の6点の地理書のみである。

- (1) ヤアクービー (d.284/897), 『諸国の書』 [Ya'qūbī 1892: 317-9]
- (2) イブン・フルダーズベ (205 or 211-300/820 or 825-911), 『諸街道と諸王国の書』 [Ibn Khurdādhbih 1889: 136-43]
- (3) ハムダーニー (280-350 or 360/893-961 or 971), 『アラビア半島地誌』 [Hamdānī 1990] (以下, SA)
- (4) ムカッダシー (d.381/990), 『地域区分に関わる詳解』 [Muqaddasī 1906: 88-92]
- (5) ヤークート (575-626/1179-1229), 『地名辞典』 [Yāqūt 1955] (以下, MB)
- (6) ハジャリー (1307-80/1890-1960), 『イエメン地名・部族名辞典』 [Ḥajārī 1984] (以下, YQ)

しかし、これら6点の内、少なくともミフラーフの考察のための資料としては、(1), (2), (4)は不適当である。というのも、上記6地理書以外の諸資料にも、イエメンの各地域区分は散見するが、それらには地域区分や地方によってミフラーフのみならずナーヒヤ、⁽³⁾アウマール a'māl, ビラード bilād といった数種類の呼称が確認できる。ところが(1), (2), (4)は、それぞれイエメンの項目に75, 84, 67の地名を挙げているが、そのすべてに呼称としてミフラーフが用いられており、その地理的範囲も北イエメンのほぼ全域に及んでいる。⁽⁴⁾これでは、ミフラーフが特定の地域区分を表しているのか、単にイエメンの諸地方を列記しただけなのか、判定できない。おそらくは、ミフラーフがイエメン固有の地域区分呼称であることから、著者が地域区分の地名すべてにミフラーフを付した結果と考えられるが、その中から本当のミフラーフを確認することは、極めて困難である。

一方, SA, MB, YQの3点は、いずれもミフラーフと他の呼称を地域区分によって使い分けており、ミフラーフの地理的範囲も北イエメンのある部分を占めているに過ぎない。これならば、上記6地理書以外の諸資料の記述とも一致するし、ミフラーフが特定の地域区分を表していることも明らかである。加えて(1), (2), (4)がミフラーフの地名を列記するのみであるのに対し、SA, MB, YQはミフラーフを含む各地域区分に関して、そのすべてではないが、当該地域区分の住民である部族に言及している。

SAの著者であるハムダーニーと、YQの著者であるハジャリーはイエメン人であり、前者はイエメンの地理や歴史に関する学者、後者はイエメン・ムタワツキル王国（1918-62）時代のワクフ行政の専門家であった。両者とも、北イエメン各地の状況に精通しており、その記述の信憑性は高い。MBの著者であるヤークートは、イエメン人ではなくイエメンを訪れたこともないが、彼はSAを含むイエメンに関する複数の地理書に加え、多くのイエメン人から直接情報を得ており[Yāqūt 1988: 10-2]、そのミフラーフに関する記述はSA、YQと同様に他の地域区分と区別し、かつ部族への言及を含んでいる。

但し、ヤークートはハムダーニーの著作を用いているし、ハジャリーはハムダーニーとヤークートの著作を用いている。このため、MB及びYQの記述に関しては、それがその当時の状況を表しているものか、過去の資料からの引用なのかを区別し、前者の記述を対象として議論を行わなければならない。ハジャリーは部族の系譜に関してはMBを引用しているが、ミフラーフの地名はSA、MBのものとは異なっている。さらにYQにおけるウズラの記述は、それまでの資料には見られないもので、ハジャリー自身が調べ記したものであることは疑いない。それゆえ、ミフラーフ、ウズラを含む北イエメンの地域区分やその居住部族に関しては、YQはSAに劣らぬ資料的価値を有している。

MBに関しては、後述するようにそのミフラーフの中には、特定の地域区分と見なすには疑問があるものもある。それゆえ、MBの信憑性は上記(1)、(2)、(4)の資料とSA、YQとの中間に位置するといえよう。しかし、そのミフラーフと部族の系譜についての記述は、ハムダーニーのものと決して同一ではない。ミフラーフについては同じものもあれば、異なるものもある。系譜も基本的な枠組みは重なっているが、MBのみに記されたミフラーフに対応するかたちで異なる部分もある。それらの違いが、当時の状況をどの程度表わすものかは判定し難いが、SA、YQに次ぐ資料として、ミフラーフの考察に援用するだけの価値はあると考える。そこで本稿では、SA、MB、YQの3点の資料を用いることとしたい。

3. 資料の中のミフラーフとウズラ

最初に、SA及びMBに記されたミフラーフを見てみると、それは末尾の表1、2のようになっている。加えて、その地理的な分布を示す地図1、2を付したが、既述のようにその厳密な特定は不可能である。それゆえ地図について

は、後の YQ に関わる地図も含めて大まかなものであり、地図上の斜線はその範囲内にミフラーフが存在することを示しているにすぎず、決して明確な境界を表わすものではないことを明記しておく。

SA は、計28のミフラーフを記している。そのうち現在のアシール地方に存在するものが2、南イエメンに存在するものが1で、残り25は北イエメンに存在している。そして北イエメンのミフラーフは、地図1にあるように首都サナア⁽⁵⁾（地図上◎で表示）より南方の、南部高原地帯に集中している。また部族との関係では、部族の記載がない3ミフラーフを除いた25のうち、ヒムヤル系の部族のみによって占められているミフラーフが11、クフラーン系の部族のみによって占められているミフラーフが2（クフラーン・マズヒジュ1、その他1）あり、残り12ミフラーフは両系統の諸部族による混住となっている。但し、その記述の内容から混住のミフラーフの中で、ヒムヤル系の部族が優勢と見られるものが5（表1: nos.2, 3, 4, 14, 19）、クフラーン・マズヒジュの部族が優勢と見られるものが3（表1: nos.8, 9, 15）ある。

MB では、計119のミフラーフが記されている。そのうち12がアシール地方に、9が南イエメンに存在し、位置を特定できなかったものが23ある。それゆえ、北イエメンのミフラーフは75となる。北イエメンのミフラーフの分布は、地図2にあるようにSAの範囲を大きく上回り、南部高原地帯から北方、西方、東方に広がっている。しかし、南部高原地帯以外に存在するミフラーフは大規模なものが多く（特に表2: nos.64, 90, 112）、それらが特定の地域区分であるかどうか、またそうであっても、位置や地図で示したほど大規模であるかどうかについては、⁽⁶⁾確証はない。反面、南部高原地帯内のミフラーフは、その数が増加しており、その地理的規模は細分化しているとみられる。そのためか、SAのミフラーフの大半が複数の部族の混住であったのに対し、MBのミフラーフには、1つのミフラーフに関して単独の部族しか記されていない例が多くなっている。

その部族との関係では、部族が記載されていないもの及び記載された部族の系統が不明なものが69あり、部族との関係を考察できるのは、50ミフラーフとなっている。そのうち、ヒムヤル系の部族が占めているミフラーフは29（ヒムヤル・アル＝フマイサア23、ヒムヤル・アル＝クダーア5、どちらか不明のもの1）、クフラーン系の部族が占めているミフラーフは20（クフラーン・マズヒジュ7、ハムダーン6、その他7）、両系統の諸部族が混住するミフラーフは1（表

2: no.86) となっている。

次に、YQ に記されたミフラーフであるが、その前に YQ についての説明を要する。この資料はイエメン・ムタワッキル王国時代の1940年代に記されたものと考えられる。当然、近代以降のものであり、かつ北イエメンの各地域区分は、第二次オスマン占領期（1872-1918）に導入され、同王国期に拡大された地方行政区分によって変容していく過程にあった。その地方行政区分の構成は、冒頭で述べた州－郡－ナーヒヤ－ウズラー村というものであるが、しかし YQ に記された北イエメン全土の地方行政区分は、これとは大きく異なる様相を呈している。そして、そこには当時のミフラーフとウズラがすべて記されており、その状況も現在とは全く異なっている。筆者はこれについて、地域区分が変容していく過渡期にあって、5段階の地方行政区分の下部の部分は、まだ伝統的地域区分の多くがそのまま残存していた状況にあったと考えている。YQの著者ハジャリーは、自らが記した地方行政区分はヒジュラ暦1360年（1941/2年）に改編されたものと述べているが、同書の内容（表3）を見ると、その改編はナーヒヤより上部のみを対象としていたとしか思えない。

表3に示したように、当時の地方行政区分には統一性が無く、それは各地方によって様々な形態をとっている。そのなかで、ミフラーフはナーヒヤ・レベルの地域区分であるものが13、現在でも見られるようなウズラ・レベルの地域区分であるものが76となっている（YQにおける北イエメン以外のミフラーフは、南イエメン2のみ）。SA及びMBのミフラーフと比較すれば、ナーヒヤ・レベルのミフラーフ、ナーヒヤ・レベルのミフラーフによって構成される郡、ウズラ・レベルのミフラーフによって構成されるナーヒヤが、SAまたはMBのミフラーフに相当する例が見られる。これらミフラーフの地理的分布を示したものが地図3であるが、その分布はやはり南部高原地帯に集中しており、概ね10世紀のSAのミフラーフの範囲と重なっている。範囲が重なっているのに、ミフラーフの数がSAに比して多いのは、上記のようにSAのミフラーフが地方行政区分導入の過程で細分化され、それ以前よりも下位の各地域区分の呼称となっているからである。それゆえ、SA及びMBのミフラーフの地名は、YQのナーヒヤの地名となっているものが多い。

表4は、YQに記された各ミフラーフと部族との関係を示したもののだが、ナーヒヤ・レベルの13ミフラーフでは、クフラーン系の部族（クフラーン・マズヒ

ジュでもハムダーンでもない) が7を占め、記載がなく不明のものが6となっている。ウズラ・レベルの76ミフラーフでは、34がヒムヤル系(ヒムヤル・アル=フマイサア33, ヒムヤル・アル=クダーア1), 26がクフラーン系(クフラーン・マズヒジュ25, ハムダーン1)の部族によって占められ、記載が無く不明のものが16となっている。

一方、YQはウズラに関する最も重要な資料でもある。ミフラーフと同様、イエメンにおけるすべてのウズラも確認しなければならないが、それが可能である最初の資料は、このYQである。筆者が調べた限り、中世にはごく少数の資料が、若干のウズラに言及しているに過ぎない。⁽⁷⁾しかし、少数でも記述があるのだから、ウズラが近代の地方行政区分導入以前から、イエメンに存在したことは疑いない。イエメン固有の地域区分の呼称であり、現在では北イエメン全土の地方行政区分となっているウズラが、中世の資料にほとんど出てこないのは何故なのか。

表3に記されたウズラの総数は531に及び、その分布は地図4に示した通りである。そのうち、ウズラ・レベルにあるウズラは354であり、残り177はウズラ・レベルにあるミフラーフと村の間という、上記5段階の地方行政区分からすれば変則的な位置にある。すなわち、ナーヒヤウズラ村という3段階の部分が、この177ウズラが存在するナーヒヤでは、ナーヒヤミフラーフウズラ村という4段階となっている。このような例は、ウズラ以外の呼称を持つ地域区分には見られない。ウズラのみが、ウズラ・レベルのミフラーフを構成する下位の地域区分となっている。

これら531のウズラとミフラーフの関係を調べると、202ウズラ(上記177及びナーヒヤ・レベルの2ミフラーフを構成する25ウズラ)がYQのミフラーフを構成している以外に、他の285ウズラがSAのミフラーフの地域と重なることが判明した。⁽⁸⁾その結果、SA及びYQのミフラーフと無関係のウズラは44にすぎず、YQに記された531ウズラの91%にあたる487ウズラが、SAまたはYQのミフラーフと関係することが明らかとなった。

筆者は以上の事実から、ミフラーフとは南部高原地帯における固有の地域区分であり、ウズラとはそのミフラーフを構成する下位のより小規模な地域区分であったと考える。10世紀のSAに記されたミフラーフは、そのほとんどが南部高原地帯に分布していた。13世紀のMBにおいて、その地理的範囲は拡大した

が、1940年代の YQ ではミフラーフは再び南部高原地帯に集中している。そして、YQ に記されたウズラについても、その大半が南部高原地帯に分布するとともに、SA または YQ におけるミフラーフの地理的範囲と重なっている。それゆえ、中世の北イエメン南部高原地帯には、ミフラーフ・ウズラという地域区分構造が存在していたということが、両者に関する筆者の第一の仮説となる。

中世の資料にウズラが言及されない理由は、それがミフラーフと村の間という、中途半端な位置にある小規模な地域区分であったことに求められよう。歴史書で何がしかの記述を行う際には、ミフラーフや村の地名に言及すれば十分である。地理書においても、ウズラが極めて多数存在することから、その確認や列記は省かれ、より上位のミフラーフへの言及に止めたものと考えられる。

4. 部族の系譜とミフラーフ

ミフラーフとウズラの地理的な特性については、ひとまず以上のような仮説を示すことができたが、ではその部族との関係については、いかなる仮説が可能となるか。上に記した SA, MB, YQ の各資料におけるミフラーフと部族の関係では、ヒムヤル系の諸部族が居住するミフラーフが、常にクフラーン系のものより多かった。SA には部族の系譜に関する記述はないが、著者のハムダーニーには『王冠の書』[Hamdānī 1986] (以下, KI) という別の著作があり、その第二巻ではヒムヤル系諸部族の系譜が記されている。SA では既述のように、部族が記された25ミフラーフのうち、23にヒムヤル系諸部族が居住している(うち12はクフラーン系諸部族との混住)。これら諸部族を KI の系譜と照らし合わせてみると、そのうちの17ミフラーフの居住部族を系譜上に確認できる。居住部族がヒムヤル・アル＝フマイサアに属するミフラーフは16、ヒムヤル・アル＝クダーアに属するミフラーフは1 (表 1: no.21) であった。そして MB 及び YQ でも、ミフラーフの居住部族は、ヒムヤル・アル＝フマイサアに属するものが最も多かった。

そこで、ミフラーフとヒムヤル・アル＝フマイサアの系譜との関係を、以下に見ることとする。SA のミフラーフに関しては、上記 KI に記された系譜のヒムヤル・アル＝フマイサアの部分をまとめたものを表 5 に示した。MB のミフラーフに関しては、同書のミフラーフの項目でヤークートが記した当該部族の系譜を集め、それをまとめたものを表 6 に示した。YQ については、著者のハジャリーが部族の系譜の部分を MB からの引用に頼っているため、この考察からは除

外する。

系譜上の人名のうち、斜体で表した人物は、ミフラーフの居住部族の名祖となっているものである。細かな説明は割愛するが、系譜上の人名とミフラーフを照合した結果、以下のような指摘が可能であると考ええる。SAにおいて居住部族が記されていた25ミフラーフのうち、KIの系譜上の人名には16ミフラーフの居住部族名を確認できる（各ミフラーフに複数の居住部族が記されているため、居住部族の名祖となっている系譜上の人物は34人）。16ミフラーフのうち、ミフラーフの地名とKIの系譜上の人名、居住部族名が一致する例が8、ミフラーフの地名と系譜上の人名が一致するが、居住部族名はそれとは異なる例が1、系譜上の人名と居住部族名が一致するが、ミフラーフの地名はそれとは異なる例が7ある。一方、MBにおいて部族の系統が記されていた50ミフラーフのうち、MBの系譜上の人名には45ミフラーフの居住部族名を確認できる（ヒムヤル・アル＝フマイサア23、ヒムヤル・アル＝クダーア5、クフラーン・マズヒジュ6、ハムダーン5、その他のクフラーン6、混住1）。複数のミフラーフに居住する部族があるため、ミフラーフと関係する系譜上の人物は40人であり、そのうち21人がヒムヤル・アル＝フマイサアに属し、その他の系統は計19人となっている。45ミフラーフのうち、ミフラーフの地名と系譜上の人名、居住部族名が一致する例が38あり、ミフラーフの地名と居住部族名が一致するが、系譜上にその名称を確認できない例が3、系譜上の人名と居住部族名が一致するが、ミフラーフの地名はそれとは異なる例が3、名称が全く一致しない例が1となっている(9)。系譜上の人名と部族名が同じであるのは、当該部族民がその人物を共通の祖先と考え、部族の名祖としていることから当然のことであるが、その名称が地域区分の地名とも一致する例が多いことは、イエメン部族社会のひとつの特色といえるだろう。

次いで、最も多くのミフラーフと関係しているヒムヤル・アル＝フマイサアの系譜を見てみると、ジュシャム Jusham という人物の子孫が、大半のミフラーフの居住部族の名祖となっていることが分かる。KIの系譜では、その名祖34人のうち、ジュシャムの兄弟が3人で、残り31人がその子孫である。MBの系譜では、その名祖21人のうち、ジュシャムの子孫である者は18人を占める。ここでは仮に、ジュシャムの兄弟及び子孫を名祖とするミフラーフの居住部族を、以下ジュシャム諸部族と呼ぶことにするが、このジュシャム諸部族に関しては、

興味深いことがある。それは YQ に記された531ウズラのうち、SA のミフラーフに関係する285ウズラすべてと、YQ のミフラーフに関係する202のうち、居住部族が記されていない92を除く110ウズラの計395ウズラが、ジュシャム諸部族の居住するミフラーフに存在していることである（表1, 4, 注8参照）。すなわち、ジュシャム諸部族以外の部族が居住するミフラーフには、ウズラを確認できない。このことから筆者は、上述した南部高原地帯におけるミフラーフ・ウズラ構造は、このジュシャム諸部族が用いていた地域区分とその呼称であると考える。これが、ミフラーフとウズラに関する筆者の第二の仮説となる。

III. 結 語

上述した第一及び第二の仮説を合わせれば、筆者によるミフラーフとウズラに関する説明は、以下のようになる。ミフラーフ及びウズラとは、中世の北イエメン南部高原地帯における固有の地域区分であり、それは前者が後者によって構成される階層的な構造を有していた。そして、それはヒムヤル・アル＝フマイサアに属するジュシャム諸部族という、特定の部族の集団が居住する地域区分であったと考えられる。第二次オスマン占領期の地方行政区分導入に際しては、南部高原地帯のミフラーフ・ウズラ構造の上にナーヒヤが乗るかたちとなり、その後ミフラーフとナーヒヤが融合する一方、ナーヒヤ・ウズラ構造が北イエメン全土に拡大された。SA, MB に記されたミフラーフが、YQ において郡やナーヒヤとなっているのは、この過程で生じた変容の結果である。そしてミフラーフは、中世においてミフラーフであったナーヒヤの、ウズラ・レベルの地域区分の呼称として残っていったのである。

しかし、筆者によるこのような説明には、多くの例外が存在する。それは、クフラーン・マズヒジュ等の諸部族が居住するミフラーフであり、SA 及び YQ のミフラーフと関係の無い44のウズラである。また、イエメン史に関しては本稿で述べたミフラーフよりもよく知られている、アル＝ミフラーフ・アッ＝スライマーニー al-Mikhlāf al-Sulaymānī 及びミフラーフ・ジャアファル Mikhlāf Jaʿfar の問題もある。これら2ミフラーフは、中世の歴史書には数多く記述されているのに、地理書には一切出てこない⁽¹⁰⁾。しかし、これらの例外や問題に関する論述は、別の機会に譲ることとしたい。

注

- (1) 本稿で用いる「地域区分」,「地方行政区分」については,人文地理ではそれぞれ「地区」,「行政区域」という用語を用いている。筆者による「地域区分」,「地方行政区分」という用語の使用に関しては,[松本1996: 104, n.1]を参照。
- (2) 北イエメンの場合,伝説的系譜に基づく部族-セクション-拡大家族という部族構造が,3段階である例はむしろ稀で,部族やセクションが複数の段階を有している例の方が多い。一般にセクションは *batn* (腹)と呼ばれるが,大規模なセクションが小規模なセクションとの対比によって,部族 *qabilah* と呼ばれることもある。しかし,ナーヒヤを占めるほどの大規模な集団が *batn* と呼ばれることはない。また, *batn* よりも下位レベルの集団は *bayt*, *usrah*, *‘iyāl* (家, 家族) などと呼ばれ, *batn* とは一線を画される。それゆえ本稿では,北イエメンで一般に *qabilah* と呼ばれる集団を部族, *batn* と呼ばれる集団をセクション, *bayt* 等と呼ばれる集団を拡大家族とした [松本1996: 90, 96-101]。
- (3) 現在の地方行政区分のナーヒヤは,オスマン帝国の第二次イエメン占領に伴い設置されたもの。このナーヒヤは同じ言葉ではあるが,イエメンに同占領以前から存在した地域区分または地域,地方に関わる呼称であるので,両者は異なるものである。
- (4) これら3地理書のミフラーフ数にはそれぞれ,アシール[°] *Asir* 地方及び南イエメンのミフラーフ11, 17, 6と,位置を確認できなかったミフラーフ17, 14, 16を含む。それゆえ,各資料に記された北イエメンのミフラーフは,それぞれ47, 53, 45となる。なお,本稿で用いるアシール地方とは,現在のサウジアラビア王国アシール州,ジーザーン州,ナジュラン州,バーハ州一帯を指す。
- (5) 本稿で用いる南部高原地帯とは,現在のムハー *Mukhā* (モカ) 郡を除いたタイズ州内陸部一帯,イップ州全域,ダマール州全域,サナア州南部一帯を指す。
- (6) ヤークートはMBの中で,既述のミフラーフの説明に加え,「ミフラーフの地域 *nāḥiyah mikhlāf*, *a‘māl mikhlāf*」,「それはミフラーフである *hūwa mikhlāf*」,「ミフラーフの名称 *ism mikhlāf*」といった表現を使っている [Yāqūt 1955, III: 40, 357; V: 68, 136, 433]。筆者はこれも,ヤークートがミフラーフを一般的な意味の地域ではなく,特定の地域区分の呼称として用いている証左と考えている。
- (7) MBには,*Bahrānah* という地名のウズラが1つ記されており,ヤークートはこれを村としている [Yāqūt 1955, IV: 119]。ほかには,14~15世紀の [Khazraji 1983, I: 217; Janadi 1983, I: 226] に1つずつ,19世紀半ばの [Sayyāghī 1984: 78] に1つのウズラが記されている。筆者が確認できたウズラの記述は,この4例にすぎない。
- (8) YQの285ウズラが存在するナーヒヤとSAのミフラーフとの地理的な相関関係は以下の通り(地名の前者はYQ, 後者はSA)。ナーヒヤ *Wuṣāb al-Sāfil* はミフラーフ *Na‘mān*。Raymah 郡はミフラーフ *Jublān Raymah*。ナーヒヤ *Maghrib ‘Ans* はミフラーフ *Alhān wa Muqrī* の一部。ナーヒヤ *Jiblah*, *al-Makhādir*, *Ḥubaysh*, *Mudhayhirah*, *Dhī al-Sufāl*, *Shar‘ab* はミフラーフ *al-Saḥūl*。ナーヒヤ *Yarīm*,

Khubān, al-Sabrah はミフラーフ Dhī Ruʿayn, al-ʿAwd wa Dhī Ruʿayn。ナーヒヤ Shibām wa Kawkabān はミフラーフ Aqyān の一部。ナーヒヤ Buraʿ はミフラーフ Buraʿ。ナーヒヤ Jabal Ḥabashī (古名 Dhakhir), Ṣabir, Khadīr はミフラーフ al-Maʿāfir の一部 (表 1, 3 参照) [Hamdānī 1990: 194-6]。

(9) 系譜上の人名と居住部族名が一致するミフラーフの総数が38と3で41となり、系譜上の人物40人を上回るのは、2 ミフラーフの居住部族が同一人物を名祖としている例が2, 1 ミフラーフの居住部族が2人を名祖としている例が1, 存在することによる (表 6: *6, *8, *13)。

(10) これらにつき取りあえず述べれば、クフラーン・マズヒジュ等のミフラーフは、その多くがジュシャム諸部族のミフラーフに隣接している。それゆえ、ミフラーフという呼称のみが、部族的背景と関わりなく彼らの地域区分に広がった可能性も考えられる。アル＝ミフラーフ・アッ＝スライマーニーは、アシール地方紅海沿岸部の大まかな地方を意味し、1002年に北イエメンのジヤード朝 (Ziyad, 203-409/818-1018) の総督を追放して、自立した人物の名に由来している。ミフラーフ・ジャアファルは、同じくジヤード朝のイッブ地方の総督の名に由来するといわれ (諸説あり)、イッブ及びタイズ方面の大まかな地方を意味する。いずれにしても、これら2 ミフラーフは政治史的背景を持つ特殊なもので、特定の地域区分の呼称としてのミフラーフとは異なるものである。

引用文献・資料

Abū Ghānim, Faḍl ʿAlī Aḥmad

1985 *Al-Bunīyyah al-Qabaliyyah fī al-Yaman; bayna al-Istīmrār wa al-Taghayyur*, Damascus.

Akwaʿ, Muḥammad b. ʿAlī al-

1987 *Ḥayāt ʿĀlim wa Amīr, Ṣanʿāʾ*.

ʿAzāzī, Muḥammad al- and Kurūzah, Hānz

1975 *Al-Jumhūriyyah al-ʿArabiyyah al-Yamaniyyah; Dirāsāt Tamhīdiyyah li-Baḥṡh fī al-Tanmiyyah al-Idāriyyah*, Beirut.

Beeston, A.F.L., Ghul, M.A., Müller, W.W. and Ryckmans, J.

1982 *Sabaic Dictionary / Dictionnaire Sabéen, Ṣanʿāʾ*.

Bosworth, C.E.

1993 “Mikhlaḥ”, ed. by H.A.R. Gibb and others, *Encyclopedia of Islam* (new edition), Leiden and London, VII, 35.

Ḥajari, Muḥammad b. Aḥmad al-

1984 *Majmūʿ Bulḍān al-Yaman wa Qabāʾil-hā*, ed. by I.ʿA. al-Akwaʿ, 2 vols, Ṣanʿāʾ.

Hamdānī, al-Ḥasan b. Aḥmad al-

- 1986 *Kitāb al-Iklīl*, 3 vols (I, II and VIII), ed. by M.b.°A. al-Akwa°, Ṣan°ā'.
- 1990 *Ṣifāh Jazīrah al-°Arab*, ed. by M.b.°A al- Akwa°, Ṣan°ā'.
- Ibn Khurdādhbih (Abū al-Qāsim °Ubayd Allāh b. °Abdullāh)
- 1889 *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. by M.J. de Goeje, Leiden.
- Ibn al-Mujāwir
- 1986 *Ṣifāh Bilād al-Yaman wa Makkah wa Ba°d al-Hijāz (al-Musammāt Ta'rikh al-Mustabshir)*, ed. by O. Lögren, Beirut.
- Janadi (al-Kindi), Abū °Abdullāh b. Muḥammad al-
- 1983 *Al-Sulūk fi Ṭabaqāt al-°Ulamā' wa al-Mulūk*, I, ed. by M.b.°A.al-Akwa°, Ṣan°ā'.
- Khazraji, °Ali b. al-Ḥasan al-
- 1983 *Al-°Uqūd al-Lu'lu'yyah fi Ta'rikh al-Dawlah al-Rasūliyyah*, 2 vols, Ṣan°ā'.
- Mad°aj, °A.M.M. al-
- 1988 *The Yemen in Early Islam 9-233 / 630-847; a Political History*, London.
- Maqḥafi, Ibrāhīm Aḥmad al-
- 1988 *Mufjam al-Buldān wa al-Qabā'il al-Yamaniyyah*, Ṣan°ā'.
- 松本弘
- 1996 「北イエメンにおける地方行政区分と部族」,『上智アジア学』,第14号,88-105.
- 1998 「北イエメンにおける地方行政区分の確立—地域区分に関わる伝統と近代—」,『駒沢史学』,第52号,299-330.
- Muqaddasi, Shams al-Din Muḥammad b. Aḥmad al-
- 1906 *Aḥsan al-Taqāsīm fi Ma°rifah al-Aqālīm*, ed. by M.J. de Goeje, Leiden.
- Nashwān b. Sa°id al-Ḥimyari
- 1981 *Muntakhabāt fi Akhbār al-Yaman min Kitāb Shams al-°Ulūm wa Dawā' Kalām al-°Arab min al-Kulūm*, ed. by °A. Aḥmad, Ṣan°ā'.
- Sayyāghī, Ḥusayn b. Aḥmad al- (ed.) (作者不詳)
- 1984 *Ṣafahāt Majhūlah min Ta'rikh al-Yaman*, Ṣan°ā'.
- Steffen, H.
- 1979 *Population Geography of the Yemen Arab Republic; the Major Findings of the Population and Housing Census of February 1975 and of Supplementary Demographic and Cartographic Surveys*, Wiesbaden.
- Wilson, R.T.O.
- 1989 *Gazetteer of Historical North-West Yemen*, Hildesheim, Zürich and New York.
- Yahyā b. al-Ḥusayn b. al-Qāsim
- 1968 *Ghāyah al-Amānī fi Akhbār al-Quṭr al-Yamānī*, ed. by S.°A. °Āshūr, 2 vols, Cairo.

Ya'qūbī, al-(Aḥmad b. ʿAlī Ya'qūb b. Wādhiḥ)

1892 *Kitāb al-Buldān*, ed. by M.J. de Goeje, Leiden.

Yāqūt (al-Ḥamawī), ʿAbdullāh

1955 *Muʿjam al-Buldān*, ed. by Dār Sādir and Dār Bayrūt, 5 vols, Beirut.

1988 *Al-Buldān al-Yamāniyyah ʿinda Yāqūt al-Ḥamawī*, ed. by I.ʿA.al-Akwaʿ, Beirut and Ṣanʿāʾ.

表 1. SA に記されたミフラーフ一覧 (10世紀)

[Hamdānī 1990: 92, 157, 167, 181, 193-214, 222-4, 232]

各ミフラーフの位置は現在の地名であり、N はナーヒヤ、Q は郡、括弧内は以下の州名を表わす。SN=サナア州、SD=サアダ州、HA=ハッジャ州、MH=マフウィート州、MA=マーリブ州、DH=ダマール州、BA=バイダー州、IB=イッブ州、TA=タイズ州、HD=ホテイダ州。また、部族に関する括弧内は、当該部族の系統を表わす。各ミフラーフの位置特定については、SA 及び MB の記述及び当該箇所に関する編者の注に加え、各種の地図や [Maḡḡafī 1988], [Steffen 1979] 等の資料を援用した。(表 2 も同じ)

1. Banī °Āmir.

位置: Dhamār(DH) と Radā° (BA)の間.

部族: Kuḥlān Madhḥij 7 部族, Ḥimyar 3 部族, Saba' 2 部族,
Kuḥlān Khath°am 1 部族, 他10部族 (系統不明)

2. Shabwah.

位置: 南イエメン

部族: al-Ashbā', al-Ayzūn(Ḥimyar), Ṣuda', Ruhā' (系統不明)

3. al-Ma°āfir.

位置: Q.al-Ḥujariyyah, N.Ṣabir wa al-Mawādim, N.Dimnah al-Khadīr (TA)

部族: al-Ma°āfir 諸部族(Ḥimyar), Saksak 諸部族(系統不明)

4. al-Saḥūl.

位置: Q.Ibb, Q.al-°Udayn, Q.al-Makhādir, Q.Dhī al-Sufāl(IB),
N.Shar°ab(TA)

部族: al-Saḥūl, Āl Shar°ab, Wuḥāzāh, al-Kalā°, 他(Ḥimyar),
al-Tabā°iyyūn(Hamdān), Buhayl, al-Mawājīd(系統不明)

5. al-°Awd wa Dhī Ru°ayn.

位置: Q.al-Nādirah(IB)

部族: al-°Awdiyyūn(Dhū Ru°ayn, Ḥimyar), Banū Mūsā(al-Kalā°, Ḥimyar)

6. Dhī Ru°ayn.

位置: N.Yarīm, N.Ba°dān(IB) 部族: Dhū Ru°ayn 4 部族以上(Ḥimyar)

7. Jayshān.

位置: N.Qa°ṭabah(IB) 部族: Dhū Ru°ayn 3 部族(Ḥimyar)

8. Radā° wa Thāt.

位置: Q.Radā° (BA), N.al-Ḥadā(DH)

部族: Kuḥlān Madhḥij 諸部族, Ḥimyar 諸部族, 他 5 部族以上(系統不明)

9. Ma'rib.

位置: Q.Ma'rib, N.Ḥarīb(MA)

部族: Murād(Kuḥlān Madhḥij), 他 1 部族(系統不明)

10. Balad al-Rakb.
 位置：N.Wuṣāb al-Sāfil(DH) , N.Ḥays, N.Jabal Ra's(HD)
 部族：Āl Abī al-Namr al-Rakbiyyūn(Ḥimyar)
11. Jublān al-^cArkabah.
 位置：N.Wuṣāb al-^cĀlī(DH) 部族：al-Wuṣābiyyūn(Ḥimyar)
12. Na^cmān.
 位置：N.Wuṣāb al-Sāfil(DH) 部族：al-Wuṣābiyyūn(Ḥimyar)
13. Jublān Raymah.
 位置：Q.Raymah(SN)
 部族：Nasl Jublān, al-Sarādif, Banū Ḥayy b. Khawlān(Ḥimyar)
14. Bura^c.
 位置：N.Bura^c(HD) 部族：al-Ṣanābir(Ḥimyar) , Hamdān 2 部族
15. Dhamār.
 位置：N.Dhamār(DH) 部族：^cAns(Kuḥlān Madhḥij) , Ḥimyar 諸部族
16. Alhān wa Muqri.
 位置：Q.Ānis, N.Maghrib ^cAns(DH)
 部族：(Alhān) : Alhān(Kuḥlān) , Ḥimyar 諸部族, Hamdān 1 部族,
 (Muqri) : Āl Muqri(Ḥimyar)
17. Ḥarāz wa Hawzan.
 位置：Q.Ḥarāz(SN) 部族：Ḥarāz, Hawzan(Ḥimyar)
18. Ḥadūr.
 位置：N.Bani Maṭar(SN) 部族：Ḥadūr, al-Ṣayad, al-Jahādib(Ḥimyar)
19. Aqyān.
 位置：N.Shibām wa Kawkabān(MH) , N.Thulā(SN)
 部族：Aqyān(Ḥimyar) , Hamdān 2 部族以上, 他 6 部族(系統不明)
20. Dhī Jurah wa Khawlān.
 位置：N.Sanḥān, N.Bani Ḥushaysh, N.Bilād al-Rūs, N.Jihānah,
 N.Bani Bahlūl(SN)
 部族：Dhū Jurah, Khawlān al-^cĀliyyah(Kuḥlān)
21. Ṣa^cdah.
 位置：N.Ṣa^cdah, Q.Khawlān(SD)
 部族：Khawlān Quḍā^cah 2 部族(Ḥimyar) , Hamdān 1 部族,
 他 1 部族(系統不明)
22. Ma'dhin wa Ḥumlān.
 位置：N.Hamdān(SN) , Q.Ḥajjahの南部(HA)
 部族：(Ma'dhin) : Ma'dhin(Dhū Ru'ayn, Ḥimyar)
 (Ḥumlān, 別名 Mikhlāf Lā^cah) : 記載なし

23. al-Ma^ʿlal.

位置：N.Banī Maṭar(SN)

部族：Banū al-Ghawth b. Sa^ʿd(Himyar)

24. Maytam.

位置：N.Dhamār の南部(DH) 部族：Kuḥlān Madhḥij 諸部族

25. Zabīd.

位置：N.Zabīd(HD) 部族：al-Ḥuṣayb(Himyar)

26. Mawr ^ʿAkkiyyah.

位置：Q.al-Luḥayyah(HD) 部族：記載なし [^ʿAkk(Kuḥlān)]

27. ^ʿAththar.

位置：アシール 部族：記載なし

28. Ḥaly.

位置：アシール 部族：記載なし

表2. MB に記されたミフラーフ一覧(13世紀)

[Yāqūt 1955, I: 86, 118, 121, 144, 222, 247, 255, 358, 452, 471, 475-6, 501, 508, 523, 528; II: 70, 74-5, 90, 102, 126, 131, 140, 144, 167, 200, 205, 234, 272, 278-80, 319, 373, 390, 407, 415; III: 32, 39, 52, 63, 68, 111, 114-5, 195, 208, 211, 224-5, 229, 265, 277, 310, 327, 335, 379, 397, 405-6, 464; IV: 105, 128, 142-3, 146, 161-3, 188, 207, 312, 423, 439, 482; V: 14, 20, 23, 58, 67-70, 102, 110, 120, 133, 136, 147, 190, 234-5, 253, 266, 284-5, 353, 363-5]

1. Abyan.

位置：南イエメン 部族：Abyan(Himyar al-Humaysa^ʿ)

2. al-Aḥwar.

位置：南イエメン 部族：記載なし

3. al-Akhrūt.

位置：記載なし 部族：記載なし

4. al-Akhrūj.

位置：N.al-Ḥaymah al-Dakhiliyyah, N.al-Ḥaymah al-Khārijiyyah(SN)

部族：記載なし [al-Akhrūj, Himyar al-Humaysa^ʿ]

5. Arḥab.

位置：N.Arḥab(SN) 部族：Arḥab(Bakil, Hamdān)

6. A^ʿlāq An^ʿum.

位置：アシール 部族：記載なし

7. Alhān, 別名 Ikhwah Hamdān.

位置：Q.Ānis(DH) 部族：Alhān(Kuḥlān)

8. Amlaṭ.
位置：記載なし 部族：記載なし
9. al-Amlūl [al-Amlūk].
位置：N.al-Shiʿir (IB)
部族：al-Amlūl [al-Amlūk] (Ḥimyar al-Humaysaʿ)
10. Amūl.
位置：記載なし 部族：記載なし
11. Badr.
位置：N.Qaʿṭabah (IB) 部族：記載なし
12. Baʿdān.
位置：N.Baʿdān (IB) 部族：記載なし [Baʿdān, Ḥimyar al-Humaysaʿ]
13. Baqarān [Baqirān].
位置：N.Banī Maṭar (SN) 部族：Banū Nujayd [Banū Majid] (系統不明)
14. Bakīl.
位置：サナア州北部 部族：Bakīl (Hamdān)
15. Banī ʿĀmir.
位置：Dhamār (DH) と Radāʿ (BA) の間 部族：記載なし
16. Banū Nujayd.
位置：N.Mukhā (TA) 部族：Banū Nujayd [Banū Majid] (系統不明)
17. Bawshān.
位置：記載なし 部族：記載なし
18. Bayḥān.
位置：N.Naʿmān (MA) 部族：記載なし
19. Baysh.
位置：アシール 部族：記載なし
20. Thāt.
位置：N.Radāʿ (BA) 部族：Dhū Thāt (Ḥimyar)
21. Thujjah.
位置：N.Jiblah (IB) 部族：記載なし [al-Saḥūl, Ḥimyar al-Humaysaʿ]
22. Jābān.
位置：N.Juban (BA) 部族：記載なし
23. Jublān Raymah.
位置：Q.Raymah (SN) 部族：Jublān (Ḥimyar al-Humaysaʿ)
24. Jurash.
位置：アシール 部族：Jurash (Ḥimyar al-Humaysaʿ)
25. Jurayb.
位置：N.Zabid (HD) 部族：記載なし

26. al-Jasrah.
位置：記載なし 部族：記載なし
27. Ju^ʿfi.
位置：南イエメン 部族：Ju^ʿfi(Kuḥlān Madhḥij)
28. Janb.
位置：アシール 部族：Banū Yazīd 6 部族(Kuḥlān Madhḥij)
29. Jayshān.
位置：N.Qa^ʿṭabah(IB) 部族：Jayshān(Ḥimyar al-Humaysa^ʿ)
30. Ḥazzah Bani Shihāb.
位置：N.Banī Maṭar(SN) 部族：記載なし
31. Ḥarāz wa Hawzan.
位置：Q.Ḥarāz(SN) 部族：Ḥarāz, Hawzan(Ḥimyar al-Humaysa^ʿ)
32. Ḥaḍūr.
位置：N.Banī Maṭar(SN) 部族：Ḥaḍūr(Ḥimyar al-Humaysa^ʿ)
33. al-Ḥaql.
位置：N.Yarīm(IB)
部族：al-Ḥaql, 別名Dhū Qubāb [Qitāb] (Ḥimyar al-Humaysa^ʿ)
34. Ḥakam.
位置：アシール 部族：al-Ḥakam b. Sa^ʿd al-^ʿAsirah(Kuḥlān Madhḥij)
35. Ḥawshab.
位置：南イエメン 部族：記載なし
36. Khashab.
位置：Širwāḥ と Arḥab の間(SN) 部族：Dhū Khashab(系統不明)
37. Khunās [Ḥufāsh].
位置：N.Ḥufāsh(MH) 部族：記載なし
38. Khawlān.
位置：Q.Khawlān(SD) 部族：Khawlān Quḍā^ʿah(Ḥimyar Quḍā^ʿah)
39. Khaywān.
位置：N.Ḥūth(SN) 部族：記載なし
40. al-Ruḥābah.
位置：サナア州北部 部族：Hamdān 諸部族
41. Rudā^ʿ.
位置：アシール 部族：Khawlān al-^ʿĀliyyah(Kuḥlān)
42. Ru^ʿayn.
位置：N.Yarīm, Q.al-Nādirah(IB)
部族：Dhū Ru^ʿayn(Ḥimyar al-Humaysa^ʿ)
43. al-Rakb.

位置：N. Wuṣāb al-Sāfil (DH), N. Ḥays, N. Jabal Ra's (HD)

部族：記載なし

44. Rayḥān.

位置：N. Banī Ḍabyān (MA)

部族：Banū Ḍabyān [Ḍabyan] (Khawlān al-°Āliyyah, Kuḥlān)

45. Raymān.

位置：N. Ba°dān (IB)

部族：記載なし [Raymān (Ḥimyar al-Humaysa°)]

46. Raymah al-Ashābiṭ.

位置：Q. Raymah (SN) 部族：記載なし

47. al-Suḥūl [Saḥūl].

位置：Q. Ibb, Q. al-Makhādir, Q. al-°Udayn (IB)

部族：al-Saḥūl (Ḥimyar al-Humaysa°)

48. Sarḥah.

位置：記載なし 部族：記載なし

49. al-Sirr.

位置：N. Banī Ḥushaysh (SN) 部族：記載なし

50. al-Sakāsik.

位置：Q. Ta°izz (TA) 部族：al-Saksak (Kuḥlān)

51. Sinḥān.

位置：アシール 部族：Sinḥān (Janb, Ḥimyar Quḏā°ah)

52. Sūb.

位置：記載なし 部族：記載なし

53. Shākil.

位置：N. Dhibin (SN) 部族：Shākil Arḥab (Bakīl, Hamdān)

54. Shaḥāt.

位置：記載なし 部族：記載なし

55. Shar°ab.

位置：N. Shar°ab (TA)

部族：記載なし [Shar°ab (Ḥimyar al-Humaysa°)]

56. Shayyabah [Shībah].

位置：Q. al-°Udayn (IB) 部族：記載なし

57. Ṣudā'.

位置：Q. Bayḏā' (BA) 部族：Ṣudā' (Kuḥlān Madhḥij)

58. al-Ṣadif.

位置：南イエメン 部族：記載なし

59. Sa°b.

- 位置：N.al-Ḥadā (DH) 部族：Sa^cb (系統不明)
60. Ṣa^cdah.
位置：N.Ṣa^cdah (SD) 部族：Khawlān Quḍā^cah (Ḥimyar Quḍā^cah)
61. Dankān.
位置：アシール 部族：Banū ^cAmr b. Kilāb (系統不明)
62. al-^cUrf.
位置：記載なし 部族：記載なし
63. ^cIṣār.
位置：記載なし 部族：記載なし
64. ^cAkk.
位置：Q.al-Luḥayyah, Q.al-Ḥudaydah, Q.Bājil, Q.Bayt al-Faqīh (HD)
部族：^cAkk (Kuḥlān)
65. ^cAlq.
位置：記載なし 部族：記載なし
66. ^cAns.
位置：N.Dhamār (DH) 部族：^cAns (Kuḥlān Madhḥij)
67. ^cUnnah [^cAnnah].
位置：N.al-^cUdayn (IB)
部族：記載なし [^cAnnah(al-Kalā^c, Ḥimyar al-Humaysa^c)]
68. Ghudar.
位置：記載なし 部族：記載なし
69. Ghutayf.
位置：Q.Ma'rib (MA) 部族：Murād ^cAsīrah al-Ṣaḥābī (Kuḥlān Madhḥij)
70. Fāwah.
位置：アシール 部族：記載なし
71. Qudam.
位置：Q.Ḥajjahの南部 (HA) 部族：記載なし
72. Qayzān.
位置：Q.Yarīm (IB) 部族：記載なし
73. Kuḥlān [Kaḥlān].
位置：Q.al-Nādirah (IB)
部族：Kaḥlān Dhi Ru^cayn (Ḥimyar al-Humaysa^c)
74. Kindah.
位置：南イエメン 部族：Kindah (系統不明)
75. Laḥj.
位置：南イエメン 部族：Laḥj (Ḥimyar al-Humaysa^c)
76. Lafwān.

- 位置：記載なし 部族：記載なし
77. al-Lum^ciyyah.
位置：記載なし 部族：記載なし
78. Majnaḥ [Mujjayḥ].
位置：Q. Ḥarāz (SN) 部族：記載なし [Ḥarāz (Ḥimyar al-Humaysa^c)]
79. Shabwah.
位置：記載なし 部族：al-Ashbā', al-Āyzūn (系統不明)
80. al-Ma^cāfir.
位置：Q. al-Ḥujariyyah (TA) 部族：al-Ma^cāfir (Kuḥlān)
81. al-Yaḥṣubayn [al-Yaḥṣibayn].
位置：Q. Yarīm (IB), N. ^cUtumah (DH)
部族：Banū Yaḥṣub [Yaḥṣib] (Ḥimyar al-Humaysa^c)
82. al-^cAwd.
位置：N. al-Nādirah (IB)
部族：al-^cAwdiyyūn (Dhū Ru^cayn, Ḥimyar al-Humaysa^c), Ḥimyar 諸部族
83. Maytham [Maytam].
位置：N. Dhamār の南部 (DH) 部族：記載なし
84. Rudā^c [Radā^c] wa Thāt.
位置：Q. Radā^c (BA) 部族：Radman, Kawmān (系統不明)
85. Ma'rib.
位置：Q. Ma'rib (MA) 部族：記載なし
86. Dhamār.
位置：N. Dhamār (DH)
部族：Dhamār b. Yaḥṣub [Yaḥṣib] (Ḥimyar al-Humaysa^c), Ḥimyar 諸部族,
Anfār of al-Abnā' (系統不明), ^cAns 諸部族 (Kuḥlān Madhḥij)
87. Ma'dhin.
位置：N. Hamdān (SN) 部族：Āl Dhū Ru^cayn (Ḥimyar al-Humaysa^c)
88. Aqyān.
位置：N. Thulā (SN), N. Shibām wa Kawkabān (MH)
部族：Shibām Aqyān (Ḥimyar al-Humaysa^c)
89. Dhī Jurrah wa Khawlān.
位置：N. Sanḥān, N. Bilād al-Rūs, N. Banī Ḥushaysh, N. Jihānah,
N. Banī Bahlūl (SN)
部族：Dhū Jurrah, Khawlān al-^cĀliyyah (Kuḥlān)
90. Hamdān.
位置：サナア州北部 部族：Hamdān 諸部族
91. Muqrā [Muqrī].

- 位置：N. Maghrib °Ans, Q. Ānis (DH)
部族：Muqri (Ḥimyar al-Humaysa°)
92. Jārān.
位置：N. Ma°bar (DH) 部族：Jārān (Ḥimyar al-Humaysa°)
93. al-Bawn.
位置：N. °Amrān, N. Raydah (SN) 部族：記載なし
94. Wādī°ah.
位置：アシール 部族：Wādī°ah b. °Amr b. Nashij (系統不明)
95. Zubayd.
位置：N. Dhamār (DH) 部族：Zubayd (Kuḥlān Madhḥij)
96. Nahd.
位置：記載なし 部族：記載なし
97. Shihāb.
位置：N. Bani Maṭar (SN) 部族：Shihāb (Ḥimyar Quḍā°ah)
98. Yām.
位置：アシール 部族：Ḥāshid 諸部族 (Hamdān)
99. Milḥān.
位置：N. Milḥān (MH) 部族：Milḥān (Ḥimyar al-Humaysa°)
100. Mahrah.
位置：南イエメン 部族：Mahrah (Ḥimyar Quḍā°ah)
101. Mihsā°.
位置：Q. Ḥarāz (SN) 部族：記載なし [Ḥarāz (Ḥimyar al-Humaysa°)]
102. Nāfi°.
位置：南イエメン 部族：記載なし
103. Najrān.
位置：アシール 部族：Najrān b. Zaydān b. Saba' (系統不明)
104. Nasafān.
位置：Q. Yar (m) (IB) 部族：記載なし
105. Wādī°.
位置：N. Bani Matar (SN) 部族：記載なし [Ḥimyar al-Humaysa°]
106. Wuḥāzah.
位置：N. Ḥubaysh (IB) 部族：Uḥāzah [Wuḥāzah] (Ḥimyar al-Humaysa°)
107. Wadā°ah.
位置：N. Hamdān (SN)
部族：記載なし [Dhū Ma'dhin (Ḥimyar al-Humaysa°)]
108. Ḥayyah.
位置：記載なし 部族：記載なし

109. Marḥad.
位置：記載なし 部族：記載なし
110. Marmal.
位置：N. Hamdān(SN) 部族：記載なし
111. al-Mazdara°.
位置：記載なし 部族：記載なし
112. al-Mashriq.
位置：al-Bayḍā'(BA) と Ma'rib(MA)の間 部族：記載なし
113. al-Maṣāni°.
位置：N. Thulā(SN) 部族：Āl Dhū Ḥiwāl(Ḥimyar al-Humaysa°)
114. Maṭārib.
位置：記載なし 部族：記載なし
115. al-Salif.
位置：記載なし 部族：記載なし
116. Waḥdah.
位置：記載なし 部族：記載なし
117. Ḥarāz.
位置：Q. Zabid(HD) 部族：Ḥarāz(Ḥimyar al-Humaysa°)
118. Ḥaḍūr.
位置：Q. Zabid(HD) 部族：Ḥaḍūr(Ḥimyar al-Humaysa°)
119. Aqyān.
位置：記載なし
部族：Aqyān b. Saba' b. Ya°rub b. Qaḥṭān(系統不明)

表 3. YQ に記された北イエメンの地域区分 (1940年代)

[Hajari 1984, I: 21-2, 31-51, 64-5, 115, 119-24, 154, 233-9, 242-4, 246, 252-5, 259, 305, 346-7, 360, 378-9; II: 420, 422, 450, 559-60, 576-7, 590-3, 656, 691-2, 694, 727-8, 746, 769-71, 779-80, 792-6]。(表 4 も同じ)

括弧内は、ナーヒヤ・レベルの地域区分に関するナーヒヤではない呼称。

suds (6 分の 1), rubc (4 分の 1), thumn (8 分の 1) qism (区分), maktab (事務所), bilād (土地), dīr (?) は、ウズラ・レベルの地域区分に関するウズラではない呼称。

サナア Ṣan°ā' 州

(郡なし)

ナーヒヤ：Banī al-Hārith ——6 suds

Hamdān Ṣan°ā' ——4 rub°

al-Bustān ——7 ミフラーフ

Ṣanḥān

	Bilād al-Rūs wa Banī Bahlūl	
	Banī Ḥushaysh wa Nihm	└8 thumn
		└5 qism
	Baraṭ	
	Arḥab	——15 qism
	Thulā	
	Sufyān	
	al-Ḥadā	——13 ミフラーフ
	°Utumah	——5 ミフラーフ ——67 ウズラ*1
	Wuṣāb al-°Āli	——8 ミフラーフ ——64ウズラ*2
	Wuṣāb al-Sāfil	└1 ミフラーフ ——4 ウズラ
		└15 ウズラ*3
	Ma°rib	
	Ḥarīb	
	Khawlān al-°Āliyyah	
	al-Jawf	
°Amrān郡	°Iyāl Surayḥ	——6 maktab
	Raydah	
	Dhibīn	
	al-Sawdah	
	(ビラード) Jabal °Iyāl Yazid	
	(ビラード) Banī °Abd	
	Zulaymah	
Ḥarāz 郡	(呼称なし) Ḥarāz	——14 ミフラーフ
	Ṣa°fān	
	al-Ḥaymah al-Dākhiliyyah	
	al-Ḥaymah al-Khārijīyyah	└1 ミフラーフ
		└2 ウズラ*4
Ṣa°dah 郡	Saḥār	
	Jamā°ah	
	Khawlān	
	Rāziḥ	
	Hamdān	
Raymah 郡	(アウマール) Raymah	——20 ウズラ*3
	al-Salafiyyah	——17 ウズラ*3
	Kusmah	——8 ウズラ*3
	Bilād al-Ṭa°ām	——8 ウズラ*3

	al-Ja ^c far —12 ウズラ*3
Ḥūth 郡	al-Qūfl
	al-Ahnūm
	Banī ^c Arjalāh
al-Maḥwīt 郡	(ビラード) al-Maḥwīt —6 ウズラ*4
	(呼称なし) Khabt al-Maḥwīt
	(ビラード) Sārī ^c —2 ウズラ*4
	Ḥufāsh —1 ウズラ*4
	Milḥān
	Banī Sa ^c d
al-Ṭawīlah 郡	Shibām wa Kawkabān —4 ウズラ*3
	(ビラード) al-Shāḥidhiyyah —7 ウズラ*4
Ānis 郡	Jahrān —9 ミフラーフ
Dhamār 郡	(ビラード) ^c Ans —12 ミフラーフ
	Maghrib ^c Ans —5 ウズラ*3
Radā ^c 郡	(ミフラーフ) al- ^c Arsh
	(ミフラーフ) al-Riyāshiyyah —4 rub ^c
	(ミフラーフ) al-Ḥubayshiyyah
	(ミフラーフ) Ṣabāḥ
	Juban
	al-Sawwādiyyah
	(ビラード) Qayfah
	(呼称なし) Damt
	(呼称なし) Radmān
Bayḍā' 郡	—
イッブ Ibb 州	
Ibb 郡	ナーヒヤ : Jiblah —14 ウズラ*3
	al-Makhādir —9 ウズラ*3
	Ḥubaysh —27 ウズラ*3
	(ミフラーフ) al-Shawāfi —5 ウズラ
	(ミフラーフ) Ba ^c dān —20 ウズラ
Yarīm	(ビラード) Yarīm —13 ウズラ*3
	(ビラード) Khubān —11 ウズラ*3
	al-Nādirah —3 ミフラーフ —31 ウズラ*5
	Qa ^c ṭabah —1 ミフラーフ —3 ウズラ
	Dhī al-Sufāl —1 ミフラーフ —8 ウズラ
	└─18 ウズラ

	al-Sabrah —13 ウズラ*3
al-ʿUdayn 郡	Shalif —1 ミフラーフ
	al-Mudhaykhirah —24 ウズラ*3
ハッジャ Ḥajjah 州	
(郡なし)	ナーヒヤ : Zūfayl Ḥajjah
	(ピラード) Ḥajjah —4 ウズラ*4
	Maswar al-Mantāb —9 ウズラ*4
	Banī al-ʿAwwām wa Lāʿah
	al-Shaghādirah wa Najrah
	Banī Qays
	Kuḥlān Tāj al-Dīn
	Naysā wa Banī Judaylah —1 ウズラ*4
	Jabar Ḥajjah
	Mabyan
	Kuḥlān Banī ʿAshab —3 ウズラ*4
	(ピラード) ʿAffār —5 ウズラ*4
Midi 郡	ʿAbs
	Ḥaraḍ
Ḥajūr 郡	al-Mahābīshah
	Kuʿaydinah
	Aslam
	Kushar
	Jabal al-Sharq
	Washḥah
	Shamr
	al-Sāhil[al-Shāhil]
タイズ Taʿizz 州	
Taʿizz 郡	ナーヒヤ : Ṣabir —15 ウズラ*3
	Sharʿab —32 ウズラ*3
	Maqbanah
al-Ḥujariyyah 郡	al-Qabbaytah
	Jabal Ḥabashī —11 ウズラ*3
	—2 bilād
	al-Maqāṭirah
	(ミフラーフ) Dhabḥān
	(ミフラーフ) Sāmīʿ
	(ミフラーフ) Banī Yūsif

	(ミフラーフ) al-Ṣalū
	(ミフラーフ) Qadas
	(ミフラーフ) al-Salū
	(ミフラーフ) al-Za ^c āzi ^c
Māwiyah 郡	Khadīr —3 ウズラ*3
	al-Huṣhā —4 ウズラ*4
al-Mukhā 郡	Mawza ^c
	(ビラード) al-Ahmūl
	(ビラード) Jum ^c ah
	(ビラード) ^c Awāsiqah
	(ビラード) Azbūd
	(呼称なし) Mushālīḥah
	(呼称なし) Zahāwī
	(呼称なし) al-Wāzi ^c iyah
	(呼称なし) Bāb al-Mandib
	その他
ホデイダ al-Ḥudaydah 州	
Bājil 郡	ナーヒヤ : Bura ^c —6 ウズラ*3
	al-Ḥujaylah
al-Luḥayyah 郡	(ビラード) al-Za ^c liyyah —3 rub ^c └3 dir
	(ビラード) al-Bu ^c jiyyah —4 rub ^c
	(ビラード) Banī Jāmi ^c —4 rub ^c
	(ビラード) al-Wā ^c iḏāt wa al-Khasm
	(呼称なし) al-Zuhrah
al-Zaydiyyah 郡	(ビラード) al-Jarābiḥ
	(ビラード) al-Ḥashābirah
	(ビラード) Ṣalīl
	その他
Bayt al-Faqīh 郡	(ビラード) Darayhumā [Durayhīmī]
	(ビラード) al-Zarā'iḡ
	(ビラード) al-Marāwi ^c ah
	(ビラード) al-Manṣūriyyah
Zabīd 郡	Jabal Rūs
	Ḥays
	(ビラード) al-Qarāsiyyah
	(呼称なし) al-Budwah

(呼称なし) al-Salāmah
(呼称なし) al-Tikaytā
(呼称なし) al-Rakab
(呼称なし) al-Ma^cāṣilah

- *1 5つのミフラーフそれぞれに, 13, 9, 12, 17, 16のウズラが存在する。
- *2 8つのミフラーフそれぞれに, 10, 8, 9, 8, 14, 3, 6, 6のウズラが存在する。
- *3 SAに記されたミフラーフの地理的範囲と重なるウズラ。
- *4 SA または YQ に記されたミフラーフの地理的範囲と重ならないウズラ。
- *5 3つのミフラーフそれぞれに, 10, 10, 11のウズラが存在する。

表 4. YQ に記されたミフラーフ及びウズラと部族との関係

ナーヒヤのミフラーフはウズラ・レベル, 郡のミフラーフはナーヒヤ・レベルの地域区分。

ヒムヤル・アル＝フマイシア

ナーヒヤ al-Bustān (サナア州) の5 ミフラーフ (ウズラなし) (Ḥaḍūr 部族)
ナーヒヤ Wuṣāb al-^cĀli 及びナーヒヤ Wuṣāb al-Sāfil (サナア州) の9 ミフラーフ (68
ウズラ) (Jublān Wuṣāb 部族)
ナーヒヤ Ḥarāz (サナア州) の14ミフラーフ (ウズラなし) (Ḥarāz 部族)
ナーヒヤ al-Nādirah (イッブ州) の3 ミフラーフ (31ウズラ) (Ru^cayn 部族)
ナーヒヤ Qa^cṭabah (イッブ州) の1 ミフラーフ (3ウズラ) (Ru^cayn 部族)
ナーヒヤ Dhī al-Sufāl (イッブ州) の1 ミフラーフ (8ウズラ) (Ru^cayn 部族)

ヒムヤル・クダア

ナーヒヤ al-Bustān (サナア州) のミフラーフ Banī Shihāb (ウズラなし)

クフラーン・マズヒジュ

ナーヒヤ al-Ḥadā (サナア州) の13ミフラーフ (ウズラなし) (Ḥadā b. Murād 部族)
ナーヒヤ ^cAns (サナア州) の12ミフラーフ (ウズラなし) (^cAns 部族)

ハムダーン (バキール)

ナーヒヤ al-Bustān (サナア州) のミフラーフ al-Rā^ci (ウズラなし)

その他のクフラーン

al-Ḥujariyyah 郡 (タイズ州) の7 ミフラーフ (ウズラなし)

部族の記載なし

ナーヒヤ ^cUtumah (サナア州) の5 ミフラーフ (67ウズラ)
ナーヒヤ al-Ḥaymah al-Khārijīyyah (サナア州) の1 ミフラーフ (ウズラなし)
ナーヒヤ Jahrān (サナア州) の9 ミフラーフ (ウズラなし)
Radā^c 郡 (サナア州) の4 ミフラーフ (ウズラなし)
Ibb 郡 (イッブ州) の2 ミフラーフ (25ウズラ)
ナーヒヤ Shalif (イッブ州) の1 ミフラーフ (ウズラなし)

表5. KIに記された部族の系譜とSAに記されたミフラーフの関係

[Hamdānī 1986, II:31-2, 67, 107-19, 146, 154, 165, 189, 223-5, 227-31, 233, 243-4, 257-8]

“||”は、系譜の省略を表わす。(表6も同じ)

‘Abd al-Shams b. Wā’ilah b. al-Gawth b. Qaṭan b. ‘Arīb b.

表 6. MBに記された部族の系譜とミフラーフの関係

[Yāqūt 1955, I:86, 144, 247, 255, 475-6; II:102, 126, 144, 167, 200, 234, 272, 278-9, 280, 407;
III:52, 195, 224-5, 229, 265, 397; IV:142, 161; V:14, 67, 68-70, 136, 190, 234, 266, 363]

Saba'

- '1 ミフラーフ Jublān Raymah の居住部族。
- '2 ミフラーフ Ru^ʿayn, Kaḥlān, al-^ʿAwd, Ma'dhin の居住部族。
- '3 ミフラーフ Jurash の居住部族。
- '4 ミフラーフ al-Maṣānī^ʿ の居住部族。
- '5 ミフラーフ Dhamār の居住部族だが、このミフラーフはヒムヤル・アル＝フマイサア、クフラーン・マズヒジュ等の混住ミフラーフ。
- '6 Ḥaḍūr 部族は、部族と同名の2つのミフラーフ(現サナア州とホデイダ州)に居住。
- '7 ミフラーフ Ḥarāz (現ホデイダ州)の居住部族。
- '8 ミフラーフ Ḥarāz wa Hawzan (現サナア州)の居住部族。
- '9 ミフラーフ Khawlān, Ṣa^ʿdah の居住部族。
- '10 ミフラーフ Yām の居住部族。
- '11 ミフラーフ Arḥab の居住部族。
- '12 ミフラーフ al-Sakāsik の居住部族。
- '13 ミフラーフ Ṣudā', Janb の居住部族。

地図2. MB に記されたミフラーフの大まかな分布

◎は、現在の首都サナア

地図1. SA に記されたミフラーフの大まかな分布

◎は、現在の首都サナア

地図4. YQ に記されたウズラの大まかな分布

◎は、現在の首都サナア

地図3. YQ に記されたミフラーフの大まかな分布

◎は、現在の首都サナア

地図 5. 現在の北イエメン各州 (1984年以降)